

Title: 「明日はどっちだ」



徳田 敬太
Keita Tokuda 1985年
生まれの食べ歩き
好き。世界という大海
へ向け、今、旅立と
うとしています。

● 最近のエントリー

- 📅 [オランパテツ](#)
(2010.02.13)
- 📅 [イスラム学校](#)
(2010.02.09)
- 📅 [オランスマブリ](#)
(2010.02.09)

● アーカイブ

- 📅 [2010年10月](#)
- 📅 [2010年09月](#)
- 📅 [2010年08月](#)
- 📅 [2010年07月](#)
- 📅 [2010年06月](#)
- 📅 [2010年05月](#)
- 📅 [2010年04月](#)
- 📅 [2010年03月](#)
- 📅 [2010年02月](#)
- 📅 [2010年01月](#)
- 📅 [2009年12月](#)
- 📅 [2009年11月](#)
- 📅 [2009年10月](#)
- 📅 [2009年09月](#)
- 📅 [2009年08月](#)
- 📅 [2009年07月](#)
- 📅 [2009年06月](#)
- 📅 [2009年05月](#)
- 📅 [2009年04月](#)
- 📅 [2009年02月](#)
- 📅 [2009年01月](#)
- 📅 [2008年12月](#)
- 📅 [2008年11月](#)
- 📅 [2008年10月](#)
- 📅 [2008年09月](#)
- 📅 [2008年08月](#)
- 📅 [2008年07月](#)
- 📅 [2008年03月](#)
- 📅 [2007年11月](#)
- 📅 [2007年10月](#)
- 📅 [2007年08月](#)
- 📅 [2007年06月](#)
- 📅 [2007年05月](#)
- 📅 [2006年10月](#)
- 📅 [2006年09月](#)
- 📅 [2006年08月](#)
- 📅 [2006年07月](#)
- 📅 [2006年06月](#)
- 📅 [2006年05月](#)
- 📅 [2006年04月](#)
- 📅 [2006年03月](#)

● ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校
NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE



RSSE 2.0

明日はどっちだ > 2010年02月 アーカイブ

10.02.13

オランパテツ

オランスマブリに続き オランパテツ(Orang Bateq)に会いにタマンネガラへ

タマンネガラ(Taman Negara)の意味はマレー語で国立公園。
70年程前に国立公園になりました。
1億数千年前の熱帯雨林が残っているといわれていて
動物もたくさんおります。
インドシナトラ、マレーバク、ガウル(牛)、
アジアゾウ(たくさんいるらしい)、カニクイガル、スマトラライ、
シカ、レオパルド、クマ、ヤマアラシ、などなど
全部で約200種の哺乳動物たちがいるそうです。

いやいや、まだまだ。
1000種を超える虫たち、300種を超える鳥たち、100種を超える両生類
などなど。
たくさん生き物がこの太古の森に暮らしています。
しかし、サルたちとたくさん会える事は受け入れやすいですが
なかなか会えないにしろ、トラがまだいたとは、ちょっと驚きました。



ナンシレマを食べ、自分で食べる食料と水を買いかいます。

いざ行かん、太古の森へ。



と、思ったら
やはりありましたね。パーム・オイル・プランテーションです。
パームヤシがたくさんある道を抜けたと思ったら
あらら、今度はパームヤシを植え替えるために荒野になっている場所へ。
と、同時に
森の深くですごく古い大きなりっぱな樹があったであろう木の幹を何本も種んで
地鳴りを鳴らしながら逆方向へ向かうトラックと何台も出会いました。
いったいどこから運んでくるのでしょうか。。。
森を大事にするタマンネガラ国立公園とは真逆の存在である、伐採。

聞いた話によると
もちろんタマンネガラの樹は切らないけど、その近くから切っている。とのこと。
いい木はわりと高く売れるらしいです。
あのトラックの数を見ると、かなりの勢いで切られていることでしょう。。





ここでも、スマブリ族の時と同様にラザックさんに案内してもらうことに。
たくさん知り合いがいるようで、
国立公園の入森証やボートの手配もしてくれて、助かりますね。ほんとに。



やはり、前回同様。
ラザックさんは
「この日本人が白まりたいって言うてるよ」と言っているのでしょう。
を言っ、自宅へと帰って行きました。

が、やはり放り出された気は拭えず、
最初はどうして良いか分かりませんね。



最初、オランパテツの人たちを見た時どう思ったかって??

そりゃあ驚きましたよ。
なんせ顔がマレー人はもちろん、オランスマブリと少し似てはいるけど遠くて
色の濃い肌と縮れた髪質。
メラネシア系とか、オーストラロイドというのでしょうか。
詳しい人種や移動はよく分かりませんが、
思った事は、彼らの先祖がいったどこからやってきたのか?? です。
アフリカからユーラシアを経てこっちへ??
それとも海から??

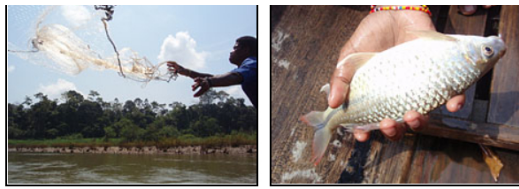
そんな事を考えると、
漁に行くということなので同船させてもらいました。
毎日行くのか聞くと、
たまにしか漁には行かない。とのこと。
ラッキーでした。



先頭に立つおっちゃんが、舵を握る少年に指示を出し船は川を下っていきます。

漁の方法は投網。
こっちの方角、もう少し左。もっと、もっと、、、よしよし、はい止まれ。
の指示通り舵を握る少年は従い、都合良く船を自在に動かします。

業人の自分にはどこを狙って船を止めて捨てるのか分からないのも少々ありましたが、
あれはおそらく川の流れや、水の温度を見極めていたのだと思います。



一見、感だけを頼りに投げている。と思える投網漁ですが、獲れるもんですね。おっちゃんたち、やります。

自分が投げたら、網とともに船から落ちるでしょう。

いやいや、
しかし、曇りの、日差しがめっぽう強いのだって！
普段からちょっとは焼けてるのですが
数時間乗ってたら顔も手も足も真っ赤っか。なんてこった。
まさか、KLより太陽の日差しが強いのか？
それともじっと日の本に座り続けていたからでしょうか。

そりゃ、子供達もライフジャケットを被って日よけしますよね。



自分が泊まったバテック族の住んでいる場所は
タマンネガラのエントリー・ポイントからポートで約20分川を上ったところの崖の上。
崖の上にあるので、マレーシア人観光客や外国人を乗せた舟、
学生達が歓声や楽しみの声をあげる舟、オランアスリがどこかへ行く舟、
などなど朝から晩まで舟の往來がよく見えます。
それにしても、ポートが来る時のエンジン音はすぐ分かりますね。
鳥たちの話し声と森の静寂の中に遠くからでもエンジン音が響き渡るの。

観光客は、
『あれが話しに聞くオランアスリの住んでいる場所か。』と思うでしょう。
崖の上から毎日幾度となく往來を見ているバテック族の人たちに、大きく手を振ってました。
おーーーい、といった風で。
でも、やはり日常風景だからでしょう。
いちいち毎回手は振り返さないみたいです。

しかし、たまに自分以外川を見ている時もありました。
それでも手を振る観光客たち。
おーーーい。

それが日本人だとも知らずに。。。





ナイトマーケットに行くらしいので連れてってもらいました。

ボートにて川を下ること30・40分くらいだったでしょうか、途中ガリンリンを買ったりしながら、少し日も傾きながら。



帰る頃には赤くなった太陽はタマンネガラのどこか奥のほうに落ちていました。もう辺りは薄暗く、ボートのスピードもやや速く感じ、子供たちはナイトマーケットで買ってもらったお菓子をかじっています。なら、自分も買ったパンケーキをバクリ。星の暮さはどこへやら。夜が深くなるほど涼しさも増していきました。



実はここから見える対岸の森からがタマンネガラ国立公園でこのパテツ族が住んでいるところはただの森です。

あのボートが通っているちょっと向こうの岸に森の入り口の様なものがあるのを確認できますでしょうか。そこから、森を抜け、山を越え、他の州までずっと続いているそう。もちろん自分に森を抜けると言っても不可能でしょう。。話しては彼曰く、森のことならまかせろ。おれは森を抜けてどこへでも行ける。とな。すごいぞ、ほんと。



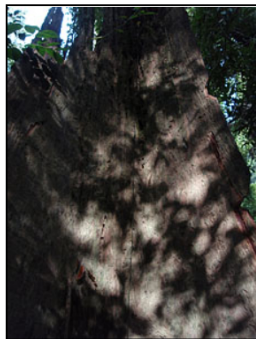
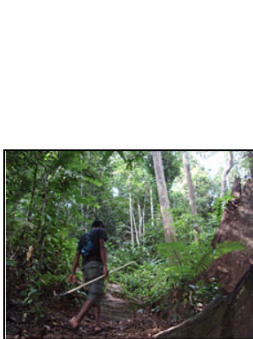


ちょっと森へ散歩に行かないか。

暇そうに森の声を聞きながら川を眺めている自分を誘ってくれました。

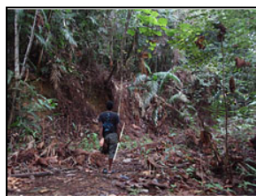
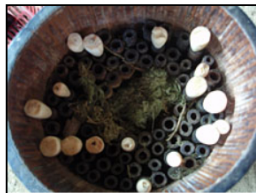
そりゃ、もちろん行きます。

スマブリ族の時と同様に吹き矢を携え出発。



どこからかの草をくしゅくしゅやっているとと思ったらそれは吹き矢を吹く時に、息で圧をかけて押し出しやすくする物。にするそうです。

でも、この森に獲物はいませんでした。もっと奥まで行かないとダメらしいです。



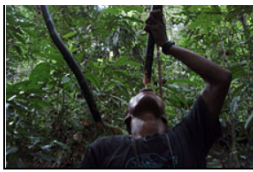
テレビでどこかのジャングルで、木から水を飲んでいる姿を見たことがありますが、まさか自分も飲むことになるとは。

水が出てくるのはラテンで、タマンネガラにはたくさん、たしか18種類だったけな。があるそうです。

この人は全て見極められて、子供たちはまだ勉強中、自分はどれが何かなんちゃ〜分かりません。

スパンッ、スパンッ、と先を尖らせたら、あらら、水が出てきました。ほぼ無味無臭。予想外にたくさん出てきて、びっくりです。普通に飲めます。こりゃ、水筒持ち赤かなくても大丈夫ですね。見極められれば。





火起こしに挑戦。

国や地域、民族や時代によって火の起こし方は様々でしょう。彼らの伝統の火起こしでは、火起こし用の木と細いラテンを使います。もちろん今の時代は彼らもライターやマッチを使っています。

写真にある通り、木の真ん中をくり抜いて、小さい穴を開けます。そして、こすりやすくする為に溝を彫ったら木の出来上がり。

ラテンは持ちやすくする為に小さい木を端に付けます。

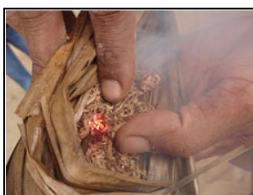
そして、木が動かないように足でおさえ、削るように、強くもなく、弱すぎず、遅すぎず、早すぎずぐわーっとうと続けると徐々に煙が出てきます。



そして、煙が出てきても、なおしぶとく、うまいこと続けると小さな火種が開けた小さな穴にできます。

それを竹を細かく細く削ったものに入ると、はい。火のできあがり！

すごいです。



パテック族たちの住むこの場所はタマンネガラの入り口に近いため、観光客が来ます。マレーシアの学生、外国人観光客などなど。

みんなさん、ガイドさんの オランアスリとパテック族について、の説明を聞いてました。それによりますと

やはり彼らの祖先はアフリカからで、
タマンネガラの中には約7000のバテツ族の家族が暮らしているそうです。
彼らは常に移動を繰り返して暮らしているのですが、
いつ移動するかといいますがと
雨で土地がダメになった時、周りに食べ物が無くなった時、集落の誰かが死んだ時、です。
この場所も数ヶ月前に作った新しい場所だそうです。
移動してきた場所から、新しく住む場所に着いたら
絶対に1日で家を造り、住む土地を整備します。
でないと、悪い運が出てくるそう。

などなど説明をしながら
火起こしや、吹き矢のデモンストレーション。

マレーシアの学生も、欧米人のグループも吹き矢大会していました。

ガイドさんが一言。
『はい、これで負けた人は今日ここで一泊ね。
あれが泊まる家(自分が泊まってる家)です。』
『えー……。むちゃな。』

って、すでに日本人が一人ここに泊まっていますけど、罰ゲームですか。。。
良いとこですよ。



やはり観光客は、ナチュラルな生活、を感じたいのでしょう。
観光客がここへよく来ることを知ると、
『じゃあ、ここは観光客用の場所なんだ。』
と一人の観光客。

そうかも知れません。
観光客が来ると女性や子供は家に入りますが、自分も隠れようと思いましたが、
彼らは快く受け入れ、生活の一片を見せてくれます。

しかし、彼らは一時ここに住んでいるだけなのです。
1〜2年ほど観光で数百リンギット(マレーシアの通貨単位)お金をかせいで
また森の奥深くへ戻ります。
そして、他の仲間とバトンタッチ。
バトンタッチする仲間の中には、
子供はもちろん大人もマレー語も英語も話せない人がいます。
まず仕事をするために言葉を教えないとダメだ。と言っていました。

森へ戻ったら、また1〜2年は町へ出ないそうです。
出ても、交代でたまに買い出しに町へ行く時だけです、1年に1回くらい。
『あー、今は良いよ。食べ物たくさん食べれるから。森に帰ったらお腹すくんだよね。
コーラ恋しくなるし、でも森大好きだね、最高。』 とな。



彼らの中に一人だけガイドをしていて、英語が少し話せる人がいました。
いろいろと話せて楽しかったです。
言葉が通じると、分からないことだらけな新文化が少し見通せて全然違います。

宗教観について少し。
彼らバテツ族は地を歩く動物は食べず、樹々の上で生活をする動物だけを食えます。
それとは逆にスマプリ族は地を歩く動物も食べます。
現に豚も鳥も食べてました。
なぜ、バテツ族の人々が食べないかといいますがと
死者を送る時に、死者が天へすぐに逝けるように
樹のてっぺんにくりつけます。
地に埋めると動物に食べられたり、荒らされたりするから、だそうです。
その点から、死者を食べたかもしれぬ動物は食べない。ということになりました。

しかし、マレーの人からの一言。
樹の上にくくりつけた死体は腐ったりして、臭いを放ちます。
タマンネガラの観光客用のトレッキングコースにもまれにそれがあって、
だからホントは樹の上に死者をくりつけて送る方法は違法になっています。

いや、ちょっと待て。。。?
タマンネガラは誰の場所。。。?
太古の昔からずっと住んできたオランアスリたちの土地?
それとも、マレーシア人みんなの土地??
でも、森の中で住んでるのはオランアスリたちで
約70年前に国立公園にして、観光客を連れてきてるマレーシア。
でも、マレーシア人もオランアスリもそれで収入の一部にしているし。
でも、オランアスリが収入の一部にしてるのは交代制だから一部の人たちだけで
他の人たちはみんな森の中で生活しているみたいだし。。。

と、一人 問答。

日が暮れていくにつれ
森から聞こえる鳥たちの賑やかな話し声はより深みをましていきます。

新月の夜。
ここは森。暗いから星がたくさん見えるんですね。
あっ。
一つ、星が、動いてる、いや飛んでるんだ。
その小さな光を追っていると、点滅していることに気がつきました。
よく見ると小さな光は音がかかって、空を飛んでいます。
あれは星が空を飛んでるんじゃないかと、
蛍が星のようになりたいたいから空を飛んでるんだよ。
と、誰かに言われた気がしました。

よく森に目を凝らすと、あっ
あそこにも、あっ
あっちにも蛍がいた。

家に呼ばれてご飯を食べてると
ストリートファイター・チュンリーの映画が発電機を使って始まりました。
ハッ！ ティッ！ ヤッ！
森に響き渡る戦いの声。
その後見始めた WWF。I am the Winner!!!!!!

夜は更けていきます。



迎えのボートに乗りエントリーポイントへ戻ってきた時は
この森を初めて見た時の印象とは全然違ってました。
もう昔の生活をしている人たちはいないと思っていた森。
違いました。
森の奥深くではまだまだ残ってます。慣習が生きてました。

ちなみに観光客が行くには、入森証にガイドとお金がかかります。





実は、火起こしには幾度となくトライしたのです。

しかし、、、一度も火種を作るまでにはいきませんでした。
彼らは簡単そうにやりますが、すごく難しいです。
自分がやったら、火種ができる前にラテンが切れてしまいます。
『あーーーーっ！！ 難しい！！』

『簡単だよ。』
どうやら徳田はパテック族になれないのはもちろん、森でご飯も食べれないみたいです。
ただ得たものは、弱った身体の筋肉が火起こしに耐えられなかった筋肉痛のみ。

帰りのボートが来る時まで何回も挑戦してると、
『これ持って帰っていいよ。』
なんと！

ありがとうとさよならを伝えてたら
火起こしグッズの点セットをいただきました。
先着2名様までパテック族特製の伝統的の火起こしに挑戦できます。



耳でとらえた パテック語(Bahasa Bateq)!
スマプリ語の時と同様にカタカナで書くため、実際に使うときは発音に注意です。

森へ行く	— チュッパッ ハッ
家へ帰る	— ウィバイヤッ
食べる	— チ
飲む	— アム
水浴び	— ナイ
家	— ハニャ
熱い	— ブッ

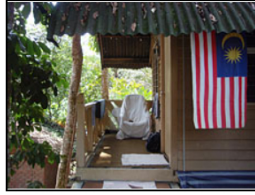
音はぜんぜんスマプリ語と違います。
もっと、流れるような、こもるような感じです。

10.02.09

イスラム学校

イスラム教の学校へ。

いろいろお世話になっているラザックさんと共に。



今回行ったイスラム教の学校の一つ目は小学生のための学校です。腹ごしらえをした後、



どうやら訪れるには子供たちへのお菓子が必要なようでスーパーにてお菓子を大量購入。



基本的に親が子供にイスラム教を学ばせたいからこのイスラム塾のような学校へ子供を送ります。時間は普通の学校の放課後、月から金の2時～5時。イスラム法、コーランの読み方、バジャウ文字(昔のマレーシアのイスラム教徒が使っていたアラビア文字)、お祈り、生き方、、、とこんな授業内容になっています。政府から送られて来た4人の先生が教えています。

小学校が終わってから平日毎日、しかも6年間の学校です。



自分が行った時はちょうどバジャウ文字の授業でした。

が、

小学校に外人が来るとどうなるか、、、

もうそりゃ授業どころじゃないですね。先生には申し訳ないですが、そろそろ自分がいる教室にどこからともなく生徒たちが集まって来てわー、わーわー！ピースやら笑顔の荒波が押し寄せます。

やっぱり、外人珍しいですよ。。。



ちょうど休憩時間だったのでなおさら。けど、たまにはこういう笑顔ってのも素敵ですね。





これもまた、なぞのローカルフルーツ。
マレーシアは熱帯だからでしょうか、
やたらいろんな種類のフルーツがあります。
もしかしたら、まだまだ知らないフルーツが出てくるかもしれません。



そして、次はポンドク(Pondok)
青年から大人のイスラム教の学校です。

青年は親から送られてきたりします。
ポンドクでの勉強が終了してからは地元へ帰って
地元の普通の職業に就いて、イスラム教を教えたりするそうです。

もっとイスラム教を深めたい大人や、身寄りのない老人もポンドクで学んでいます。

イスラム教の勉強だけに集中するため、ポンドクの家は簡素で無駄な物がありません。
食事も自分で作るそうです。



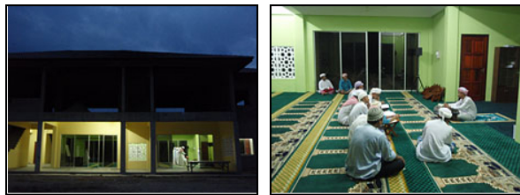
訪れたポンドクはまだ新しくて工事中で、
なにやらブルネイからの寄付で建てられたとか。
行った時は9人の男性と1人の女性、そして先生が一人いました。

写真にはないですが、さりげなく自分もマレーの服を着ています。



お祈りをした後はコーランの読み授業でした。

自分はイスラム教徒じゃないので中に入れないです。
外からの見学のみ。



夜はラザックさんの家族と夕食。
タイのマレー料理です。
ちなみに南タイにはイスラム教徒のマレー人が住んでいて
だから、この食事はイスラムの人でも食べれるんです。



post by 徳田 敬大 | 日時: 2010.02.09 | [パーマリンク](#) | [コメント\(0\)](#)

[明日はどっちだ > 2010年02月 アーカイブ](#)

オランスマブリ

今回はマレーシアの原住民といわれるオランアスリのお宅へ。
とうとう訪れるとは、、、マレーシア人訪問もここまでできましたか。

ちなみに オラン(Orang)は人、アスリ(Asli)は元々のとか元来の、の意味です。

オランアスリは、よくオランアスリとひとくりにされがちですが、
オランアスリといってもさまざまで、マレー半島内で18民族います。
ネグリトやセナイ、プロトマレーなど大きく分かれていて
パテック族、スマブリ族と民族名も言葉もこれまたさまざま。

その分け方は、
数千年前にマレー半島へ来た人たち、オーストラリアのアボリジニーみたいな。
とか、
数千年前に中国雲南の方から来た人。
その後、
マレー人やインドネシア人、中国人、アラビア人などと混血が進んだ人たち。
などなど、
文化人類学的でしょうか、いろいろと調べれば深く書く事ができるのですが
ちょっとそこまでは行かないでおきます。。



現代は、マレー人や華人と混血が進んだり、改宗したり、町に住んだり、
森で住む事を止めたりしている人たちがたくさんいます。
しかし、
やはりまだ森に暮らすオランアスリたちもたくさんいて
主におおざっぱですが、マレー半島の真ん中あたりの森、タマンネガラらへんです。
などに昔からの生活をしている人がいます。
今回は、パハン州はジャラントットゥの近くの、タマンネガラのまた近く
ハリラヤでお世話になったラザックさんの紹介にて訪れることに。



いちおう、水やお菓子や食べ物ちょいちょい買いつつ。
やたら高くて、シンガポール人が買い付けにくる川魚を見たリ
オランアスリが森から獲って来たヤマアラシなど
ジャブを打った後、

近くの オランスマブリ(Orang Semoq Beri)の家族の元へ。



ジェラントカットウ・フェリーからちょっと行った所に
政府が土地をスマブリ族にあげて移住させた場所があります。

そこへの入り口。

さすがに今回ばかりは、何かあるのかとどきどきしました。

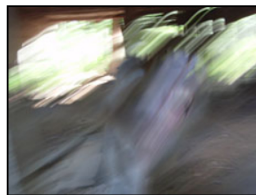
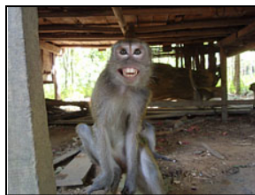


ラザックさんは
「この日本人が白まらいたって言ってよ」みたいなことを喋って
以外に早く家へ帰って行きました。

あらら、この若干不安な心も露知らず。。

もう、とりあえず猿がいたので
猿に向かってにっこり。
そしたら猿もにっこり、、、

じゃなくて、くわっ！！ って きーーーー！！ってやられました。
びっくり。



今回もクリスマスに行ったボルネオ島、サラワク州のビダユ族のように
しかし、それとも全然違う、もちろんマレー人も全く違う
でもマレーシアにいる、という空間にいたこととなったのです。





電気、ガス、水道がまったくないこの場所。
村と呼ぶにはちよいと小さく、
集落？ともなんともしっくりこず、
家がら戸なので、場所。としますか。。

の場所から少し行くとせせらぎがあって、
そこで身体を洗うそうです。
なんと、これまた
森の中のせせらぎで身体を洗う時代が
自分のフィールドワークでとうとうやってきましたか。
と小さなバケツでゆっくり流れていく水をすくい
パシャッ、パシャッ、
最初は少しひんやり感じる水をかけ、身体を流します。
これもまた、良いもんです。



チェスマン、彼の家に泊まらせてもらいました。
と少年と共に細いラテンを数本集めに森へ。

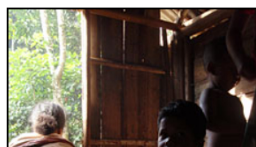
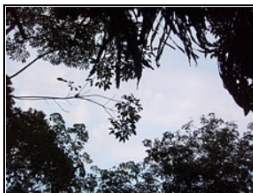


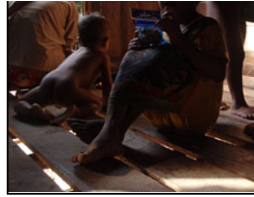
彼は繁った森の中から使えるラテンをすく見つけ
左の側に差したナイフで
サラッ、スパッ っと皮を剥いで、くるくるっと輪投げのようにして集めてました。
いやいや、おみごと。
森の知識を少し理問見ました。

ちなみに少年は裸足。
信じられません。。。
この森で裸足とは、なんぞや。
スタスタと何事もなく歩くので、
さぞ強い足の裏を持っているのでしょう。



何の為にラテンを穫って来たかと思ったら
小さい家のような、小屋のようなものを作る用のロープ代わりの為でした。
子供たちがラテン輪投げしている横で縛るチェスマン。
綺麗に縛れるもんですね、ラテン。
ぜんぜん切れません。切れそうになる素振りもみせません。
とりたて、縛りたてのラテンは水分が残っていて、
まだやわいですが、
しかし、縛ってから数日は経ったラテンを見てみると
すっかり乾燥して、握むであろうと推測させる気も起こさないほど
しっかりと木々に巻き付いたままです。
ラテンはやり手ですね。





彼らの収入の一部に、家の回りに植えてあるゴムの木の収入があります。毎朝、皮削りしてました。ゴムの木の皮削り専用のような変わった形のナイフで皮を削ったらそこから白い液がスーーーーっとその削ったトコをつたって集めのカップの中へ一滴滴、落ちます、溜まります。カップがいっぱいになるには数日間かかりそうです。。



ガスがないので薪も森から拾ってきます。枝を拾うのではなく、幹を斧で細かくして使っていました。





と、家の中でお茶を飲んでると
彼らの親戚が近くの場所から来ました。
彼らもスマブリ族です。



その親戚の家は政府から援助されたコンクリートの家です。
しかし、彼らの伝統的な木と竹と葉で作られた家とは似ても似つきません。
彼ら曰く、
あの家は暑いから好きじゃない、木の高床式の家が良い。
とのことですよ。

そして、ヤ半の ゆ〜 という運弾の鳴る高床式ヤ半小屋を横目に見、
小さいバムヤシのある道を草をかき分け進み、
着いたところは

パーム・オイル・プランテーション。

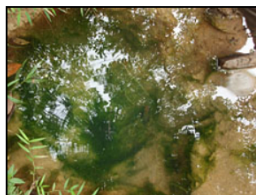
子供たちはプランテーション内の川を見るとすぐに
そくそくとダイブして、服を着てようがまいが関係なく、ダイブ。
どぼんっ。
なんと、無垢で無邪気な子供たちなんだろうか！
森に行けば樹々で遊び、川があれば飛び込んで、
家の回りでは駆け回り、みんなで遊んぶ。
笑って、たまに泣いたりしますが、そんなのどうってこたないですね。
子供は遊ぶのが仕事。
という言葉がピッタリ当てはまってて素敵でした、ホントに。



まあ、正直、
前にプランテーションへ行った時に除草剤の話聞いたので
ちょっとそこらへんが不安ですが大丈夫ですね。。たぶん。
なんせ低い草はありますが、パームヤシ以外他に木がないもんで。



水道がないので水汲みもします。
せせらぎの他に湧き水も近くにあって、そこから食事用の水を汲んでました。





自分が来たからでしょうか、
豚かイノシシをどこからか獲って来たのか、買って来たのか、
でバーベキューです。

ビダユ族は毛をバーナーでささっと現代的にやりましたが
ここでは
パチパチ、と鼻をもって火に直接当てて焼いて剥ぎます。
内臓や肉は竹串に刺してました。あれはおそらくレバー。
たとえ肉を直接焼きに置いて焼いていようとも、それでススが付いていようとも
ここでは全然気にならないもんですね。
と言いますか、あれが自然であり、普通に感じてました。
おいしいですし。



犬も鳥もおこぼれをもらおうと近くをうろろう。

緩やかに煙は縦に上り、和やかに時間は過ぎていきます。





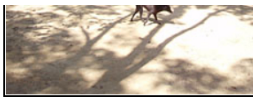
そして、ちょっとの狩りへ。
オランアスリの一部の人たちは吹き矢で狩りをしています。
この吹き矢はけっこう長く2mくらいでしょうか、推定。
吹き矢の黒い筒は、その中にある2本の細い竹を守る為のものです。
だから、たしか3つのパーツで出来ています。
竹もちょっと特殊で、細くて長い竹はなかなか無いそうで
吹き矢を一本作るのも大変だそうです。

吹き矢の矢。
彼らは矢先に毒を塗って狩りをします。
その名を「イボー」
マレーシアのある街の名前にもなっています。
木の上にいる小動物を射った時は、数分で木から落ちるらしいです。



リスが木の上で遊んでましたが、残念。
収穫ならず、でした。
しかしそりゃ、
ゴムの木やらプランテーションに囲まれたこの場所での狩りは難しいですね。。





ゴム林を抜け、バナナ林を抜け、
少年がとってきたのは、何やらの実。
間違いなくローカルフルーツ。
マレー語でドック(Duku)というそうです。



家へ戻ると、また何やらのローカルフルーツ。
その名を、マレー語ですがランベイ(Rambei)。
残念ながら日本語はもちろん、英語の名前も分かりません。
ラテンの一種から穫れる、と言っているとような気がします。。。
しかしこれがまた、
すっぱい！！
みんな砂糖を付けて食べてましたが、すっぱいの何のって！

でも、ホントに見た事ないローカルフルーツを食べてるのも良いもんです。



ここで、せっかくなので 耳でとらえた
サババール スマブリ語(Bahasa Semoq Beri)
カタカナ表記なので、もし使う時があったら発音に気をつけてくださいね。

- | | | |
|--------|---|------------|
| ご飯を食べる | — | インチャナン |
| 分からない | — | ラーイン |
| 犬 | — | ジョー |
| 水 | — | ジャオ |
| 熱い | — | ブッ |
| 涼 | — | タラウ |
| 森へ行く | — | スワッ カブリッ |
| 家へ帰る | — | イヨッティアン |
| 頭 | — | コイオン |
| 親戚 | — | オンッ |
| 水浴びをする | — | ジャンマル マハミイ |
| 赤ちゃん | — | カッコン |
| 後で | — | ディドワイ |
| ふた | — | ジャル |
| パン | — | チャルティ |
| 板 | — | テッロ |
| パイプ | — | オンチョイ |

それと、おっちゃんが子供によく言ってた
アーモッ オイ！！ って言うのが気になりました。

言葉の音はマレー語とも違います。
力強く飛ぶような、跳ねるようなかんじです。





どこからともなくバイク音が。。

すると、彼らが声高らかに叫びました

「アワワワワワワワワワ」 「オウォウォウォウォウォ」

昔、彼らの住んでいた森が走馬灯のように目の裏を走ります。

何事！？ 突然。

バイクに乗ったおっちゃんが登場しました。おかし売りの人です。
やはり町が近いからたまに来るみたいです。

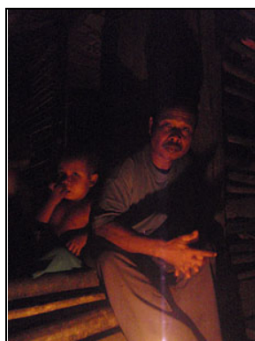


猿が突然騒ぎ出しました。

何事！？ 今度は？？ なに？

どうやら、何もなかったようで、誤報です。
スマブリの男たちは猿にとつとつと教えています。
言葉は分かりませんが
しっかりしろ、誤報は違うだろうよ。と言っていた風でした。
聞くところによりますと、あの猿はスマブリ語が分かるそうです。

と、
毛づくろいもやってもらっていました。



いったい何時に寝ていたんでしょうか。
太陽が落ちて暗くなったら大人たちはランプを点け、
子供たちは明日の仕事先に昼の疲れを癒すべく床に付きます。
自分もKLでは少々夜は起きれるのですが、
ここは違いますね。
自然のリズムの中に入っています。
朝、いつぞやから明るくなった空で目を覚まし、子供たちが早々遊んでいる姿を見て、
昼、飯を食べ、暑ければ休み
夜、暗くなったら甘いお茶を飲んで、慎重に蚊帳で虫を完全遮断して安眠を心がけ、
悪夢はマレー湖に食べってもらうようお願いして目をつぶります。。

静かです。
都市の雑音のないこの空間だから、いくら床が堅くとも寝てしまいます。
たまにゃあ、そのシンプルな流れの中に身を置くってのも良いもんですね。

カテゴリ:

post by 徳田 敬太 | 日時: 2010.02.09 | [ホームページ](#) | [コメント \(0\)](#)